

南太平洋海戦

東京都 寺島 俊

戦闘ラッパのけたたましい響きと共に、番兵の大声「総員！ 戦闘配置につけ！」、がばつと跳ね起き、ベツト整頓、受持ちの零戦へ。本日第一発進の三機（偵察機二機・戦闘機一機）この戦闘機一機が我が班の受持ちである。

昭和十七（一九四二）年九月〇〇日、我が航空母艦「翔鶴」はトラック島軍港の基地を出撃、南方洋上ソロモン海域を南下す。第三航空艦隊の旗艦として、二番艦「瑞鶴」、三番艦「瑞鳳」の順に索敵行動と敵航空機の攻撃を想定した過酷な訓練

を続行しつつ南下をつづける。

十月二十五日「空母五、六隻を含む、大艦隊北上中、サンタクルズ諸島北方〇〇地点」、「敵艦隊は空母六、戦艦、重巡、軽巡等六十隻以上を認める。敵は得意の輪形陣を組みつつあり」等の入電がつづく。

いよいよ明朝から戦闘だ。前夜から飛行甲板に待機させた第一発進の三機、その一機の零戦のチヨーク（車輪止）をタイミング良く外す仕事が、私と同期の斉藤の仕事だ。我が班長が乗り込みエンジン掛ける。三分後にはエンジン全開の試験を繰り返す。物すごい推進力によってチヨークを乗り越えそうな勢い。そこは今日までの訓練によって得た技によって乗り切る。

この頃から艦の速度は最大速に近く、向かい風も加わって強風の連続である。艦の機関も最大出力と思われる振動が、この飛行甲板にも伝わって来る。飛行機も最高出力の試験中もちよつとの油断で、吹き飛ばされて海中へ直行だ。

続いて搭乗員（飛行兵）が乗り込み、班長が当機のエンジン、その他を点検し「異常無し」の伝達がある。深くうなずいて敬礼する。班長も敬礼を返し、なお彼の背を叩いて再度敬礼する。

座席につくと、再々の全開試運転を繰り返す。三機そろってOKのサインが出る。三機の前方に仁王立ちの掌飛行長によって振られる手旗に従い一機づつ発進して行く。飛行甲板の両側に並ぶ将兵も皆手を振り、ハンカチをかざして見送る。

私は零戦のプロペラ風に吹き飛ばされないうよう、チヨークを押さえて飛行甲板を滑らせて、ポケット（作業員待機所）へ飛び込む。（先刻、ポケットに投げ込まれた厚い三機分のシートが、後に私を含め整備員と兵器員の命を救う）。このポケットに

は戦闘中の飛行機が燃料及び機関銃の弾丸の補給のために着艦するので、これに対応するために燃料補給用ホースが整備されている。

先発三機について第二、第三と発進が続き、全機の発進が終了、航空母艦が全速を出したため護衛艦の大半は追いつけない。重巡洋艦の最新鋭の「大淀」と軽巡洋艦二、後は駆逐艦四隻のみである。近代航空戦には時代遅れの大戦艦は無用の長物と言う外なかった。あまりに古い戦艦、重巡は、ただ出撃のとき隊列を整えるに止まる。

既に足の早い空母三隻はサンタクルズ海域に入っていたのであった。

うねりは大きいかれども波は見えない。油を流したような海面を大きく右に旋回、北に向いて航海を始める。「翔鶴」に続いて「瑞鶴」「瑞鳳」も。しかし護衛艦は巡洋艦、駆逐艦合わせて二十隻には足りない。足の遅い戦艦など一隻もないのだ。

昨日までの第三航空艦隊の陣容は、中央一列に「翔鶴」「瑞鶴」「瑞鳳」、右舷に戦艦「武蔵」以下

二隻、左舷は戦艦「大和」以下二隻、前方に「大淀」ほか重巡二、「武蔵」の右舷に巡洋艦二、駆逐艦五、左舷の「大和」の左舷にも右舷と同様の隊列、後方には巡洋艦二、駆逐艦三という堂々たる艦隊行動であった。

我々新乗組員は知らぬこととはいえ、一番空爆を受け易い艦の左舷、飛行甲板最後尾のポケットにいて、次に来る補給のための零戦を待っている。十数人、正に死を待っていたようなものであった。このことは後で判った事だが、誰も教えない。

全機発艦し終って、二十〜三十分過ぎた時、艦の後方に友軍機がくる。艦の飛行甲板は着艦準備が早々整い待つこと二分、一機また一機、三機が帰艦す。一機は被弾のため直ちに修理に掛る。そのためリフトを使って格納庫へ。残りの二機に燃料と弾丸を補給して直ちに発進させる予定で一機は無事発進する。その時艦内の拡声器から「前方〇度から敵戦闘爆撃機」と。次の一機は、いざ発進の寸前であった。

げられる中、また高射砲の花火のごとくばらばらと炸裂する中を、その弾丸に向かって真一文字に突っ込んで来る。なお自身を鼓舞するためか、しやにむに機関銃を発射する。この攻撃振りは見上げた度胸、アメリカ兵は弱い、なんてデマだ。物凄いや集中力、技術力、ヤンキー魂である。下方は海面すれすれに飛ぶ。我が艦の飛行甲板の高さに比べて半分、海面十メートル位のところを魚雷を抱いた奴が、適確な方向と距離で魚雷をぶっ放す。

その魚雷の航跡を見極めるごとく我が「翔鶴」のかわし方のうまさである。実によく出来た艦で、その上運用術の見事さと操舵の正確なことである。全速力三十八ノット、その上に右、左と方向を変え、魚雷をかわし、また上から来るグラマンの急降下に備えて、この大きな艦が右に左に曲がる度に大きく傾く。艦内の火砲は全門が撃ちまくる。

騒然、喧噪、轟音がバンバン、ドンドンとずさまじい。

「右舷、艦橋の前方三十メートルに二発の至近

どうするのか「飛行士は、南京空爆の頃の生き残りの有名な〇〇兵曹長」であったと後で聞く。本人の強い意志によって、彼の戦闘機は発艦直後から敵機に向かって上昇する。不可能といわれている、下降して突っ込んで来る敵機にまっしぐら、敵も逃げない。艦の前方八百メートルぐらいの上空で両機は火の玉となって落ちた。これが最前線の戦いである。内地にいる高級将校にどこまで、このような前線のむごさが分っているか。

我が艦の二連装高射砲、三連装機関砲が一斉に火を噴く。身体の奥まで「ずしんずしん、がんがんと、訓練中のものより一段と強い。艦の外を見ると、重巡、軽巡、駆逐艦に敵機が群がって攻撃している。そのうち軽巡一隻が群がる爆撃と魚雷をかわし切れず、真中から二つに折れて轟沈。次に駆逐艦まで魚雷の餌食となって物すごい火柱を上げ沈没、間髪を入れず我が艦にも敵機の攻撃が始められた。

機関砲の徹甲弾、曳光弾、焼夷弾の雨と打ち上

弾炸裂せり」「負傷者あり」と艦の拡声器が叫ぶ。同時に我等整備員の待機所(ポケット)のすぐ下、艦の左舷最高部の高射砲と機関砲甲板に敵爆弾が命中、これの破裂によって機関砲の自動回転式銃座三基、三連装機関砲二基、そして下士官兵は跡形もなく飛ばされた。そばの高射砲二基と士官及び下士官、兵も半数が戦死(多数の者が飛ばされて遺体なし)する。

我等のポケットも、爆烈の熱風と破片によって吹き飛んだ者二人、次の場所にいたI君(爆撃機の整備員)は、前頭部から後に抜けた鉄片にやられて即死。次の兵器係の兵は顔の半分と片腕が鉄の破片に切り取られ、これもまた即死同様で、我等が気付いた時は既に駄目だった。その次にいた私はおでこにかすり傷、服の上から右腕と右肩に小さな破片がささる。私より後部にいた皆は、無事。厚いシートの重なった上に乗っていたのが幸いして、数分間の気絶だけで済んだ。

二、三分後と思われるが、今度は我々のいた所

より約七、八十メートル前部に一発命中、火災は大きい。強い悪臭と煙が我がポケットに降り掛つて来た。この煙が、一時的に気を失ったポケット内の十二人を気付かせた。首をのびして飛行甲板を見ると、右舷の方は煙が少ない。敵機の機銃掃射等を気にせず、右舷に向かって進もうと決し、皆で助け合つて防毒マスクを着用、飛行甲板へ上る。

第三リフト（前から三番目の最後尾、攻撃機用）が一・五メートル程カマボコ状に曲つて、その下から煙が上り始めている。甲板には、鉄やジュラルミンの破片が散らばり、その中に兵員の死体も五、六体、なお見ると掌飛行長も発進指令用の旗を握つたまま戦死しておられる。強風に飛ばされぬよう、同時に敵の機銃弾を浴びぬように匍匐前進して素早く右舷機関銃甲板に取り付く。

早速仕事が待つていた。その機銃三基の指揮官より「この場の機銃三基は使用不能」と。右舷最後部に至近弾が爆発したために兵は半数負傷と戦

うなおつさんが、「ボーヤ、整備分隊の艦攻、艦爆、戦闘機それぞれ全隊員の朝食が戦闘機の第一格納庫にある。早く行つて、ほうばれや」とにっこり笑つて七人をうながしてくれた。

私の属する戦闘機分隊の零戦係の下士官、兵など多数が食事に集まつており「オー寺島、生きていたか」と迎えてくれる。中には抱き付いて来る上官等もいた。衛生兵がおでこと右腕、右肩に応急手当の消毒をしてくれる。病室は満員、士官食堂まで重傷の火傷や片手脚の者多く、約五百人は負傷者がいるという。

「戦闘機」は仲間内では「戦斗キ」と書く。

残りのむすび一個をかじりながら艦の火災時の持場や左艦飛行甲板六番の消火栓に駆けつける。先輩二人が既に駆つていて「寺島！ 良く生きていた」「サーホースを延長して火に向おう」「筒先はお前の仕事だったな」「敵の機銃掃射はめくら打だ」「恐れるな」「もつと前に進め」「火に近付け」等と先輩兵長の声。「よし」「水を送るぞ」「消

死、弾だけ残つた。この隊の生き残りの兵は機関銃の弾を前方の生きた銃座へ運んでいる。手伝つてくれと頭を下げられた。

全員承諾し、肩に銃弾ケースを乗せられる。重い、この重さに耐えて飛行甲板を百五十メートルの向い風に抗して行くのだ。足元は艦の側面はラッパ状に開いて破裂、飛行甲板も所々吹き飛んでしまつてゐる。しかし先方の機関砲は下から運ばれて来る弾丸の昇降機がやられて、人力で持ち上げるため量が少なく困つてゐるという。敵機の機銃弾に当らば当れ、それまでの命だ。

五分近く掛つたと思うがやつと運搬役から解放される。周りを見ると私を入れて七人、他の兵は、海に落ちたか？ 運が良ければ後続の駆逐艦が拾つてくれるのだと聞く。

少年時代からのスポーツ選手で得意の運動神経がこの時役だった。「お国のためになつたかな、艦の護りに少し役だった」と一瞬思う。艦橋下まで、朝食のおにぎりを運んで来た主計兵の人の良さそ

火栓の元栓を切る」の声と共に力強い答えがあつて水が走り出す。筒先を炎に向けて頑張る。四、五分後、我が艦の機銃と高射砲の音が止む。

艦内拡声器から「敵攻撃がしばらくない。夕暮れまでに手明きの総員は消火に掛れ、別動隊は排水に掛れ」と。気がつくと艦が右舷に五度ぐらい傾いている。

しばらく消火に全力をそいでいる我々の鼻先で、我方の砲弾が火災によつて自爆を起した。消火を止め、少し後方（艦の前部）へ引く。一分と経たぬ内、今度は大爆発。艦全体にも響く大音響で当艦の魚雷が爆発、周りの甲板や高射砲、機関砲、及び飛行甲板にぶら下がる形で作られていた後部の全ポケットは無くなった。しばらく前、私共十六、七人が飛び込んでいた所は跡片もない。

また、艦内放送及び甲板拡声器によつて「日没までに必ず火を消すよう。また消火用の溜り水を排出するよう。総員掛れ！」「艦の傾斜、現在十度」「艦の速度はただいま二十ノット、これ以上は出

せない」など拡声器は繰り返し呼び掛ける。

火を消すには放水は止められない。必死で火のそばに進んで行く。もう一発魚雷がハズレれば、この身は空中に飛ばされ、鱧の餌食さ。暗くなる寸前全艦内の火は消し止めた。

自艦内の暴発も止む。しかし艦の速度は遅い。せいぜい十八ノット位だろうと皆感じている。艦内の水の量はすごい。艦底常備のビルヂポンプは最大排出の運転、同時に移動式ポンプ二十基が全部出されて全開、少しづつ艦の傾斜が少なくなり始める。

やつと昼と夜の一緒になった食事（非常食）をとる。この食事を届けてくれる主計さんには心から感謝する。戦闘中は総べての弾丸、魚雷運びに全員が掛って、いつの間にか拵えるのか。これを手伝う軍属の「床屋」「クリーニング屋」「ラムネ職人」「ようかん職人」など皆々一緒に主計兵同様弾運びをする。その間に米を炊く、おむすびを作る、艦内に配って歩く、艦の中は階段ばかりで昇った

官から「有難う、御苦労」と言われ、再び血液六〇〇ccを採る。明日、作業中に具合悪くなったら病室に来いと申し渡された。

朝食後すぐに飛行甲板へ。すでに二百体ぐらいの戦死体が並べられていた。先任士官の小島さんの命によって当十五分隊（戦闘機整備分隊）員を探す。「見付けたら報告せよ」と言われてた。当分隊員七人によって戦友探し、見付けると顔と頭部を白布で覆って名札を付け、毛布を使って全体を巻き、その上に軍艦旗を巻き付ける。この「御体を」工作兵による急拵えの滑り台に安置する。このようにして二百体を安置する。全遺体分の滑り台は間に合っていない。

全部の遺体に軍艦旗が巻かれると、次々に最後尾の後甲板まで戦友達の手で運ばれる。ここで今度は全遺体の脚のひざを中心にして百キロ爆弾の信管を外した一個が固定され、滑り台上へ。こうした準備が整うと、後甲板にはすき間の無いまで下士官、兵が集う。後甲板に並びきれない者は機

り下ったり。重量オーバーの弾丸ケースや砲弾、食料特に樽入り漬物などを一々持ち上げていたらきりが無い。いくら力持ちであつてもだ。いつも感謝しながら食す。

病室から連絡あり、負傷者多く血液が不足、特にB型という。早速病室へ行って驚く。何とやけどの人の多いこと。次に片腕片足である。約五百人の負傷と聞く。私は輸血のため二〇〇ccを二回採られる。しばらく血圧など調べた上、もう二〇〇cc良いかと質問される。この多くの軍人がかくもひどい目に合っているか。もう二〇〇cc、合計六〇〇cc結構ですと言いつ腕を差し出した。その間に私の額のカスリ傷や左肩、右腕の金属片を取り出して、充分だとは言えないながら手当としてガーゼで止めてこれで終わる。こんな軽い傷は手を掛けない。

病室内のあちこちから「水・水・水をくれ」と力ない声がある。身体を動かすことの出来ない六人の面倒を見て、十二時までつき合う。衛生下士

銃甲板や高射砲甲板にそろう。軍楽隊が演奏を始める前までには、第三航空艦隊の司令長官をはじめ、艦長、副長、軍医長以下将官、佐官、尉官などが飛行甲板の後部に集合して、「海ゆかば 水浸く屍」の調べに合わせ全員合唱の準備をする。

一方、工作兵は昨日来、後甲板右舷に作られた水葬礼用のやぐらの滑走路に一遺体を乗せた滑り台を置く。副長の合図によって軍楽隊が奏し、同時に全参加者が敬礼と合唱をする。滑り台は静かに滑って海面すれすれまで、ここで台は止まる。遺体だけが静かに海底に迎えられる。一人づつ官

民名を呼ばれ、全員の深い敬礼によって送られる。

南太平洋ソロモン海域の海底を永久の墓場として、眠りについてくれと「心の叫び」、次の日も、また次の日も、このような水葬礼が行われる。四日目には艦の傾斜も直り、上甲板、飛行甲板、前後部の飛行機リフトなど破壊されているが、艦の下甲板以下残りの区画が大きく、艦の運用には充分の力が残った。魚雷を全部かわした。これが大

きな手柄と言える。しかしなお、艦の全指揮を取る艦橋は無傷でこれが最大であった。これには機関、運用、飛行、整備、などが一丸となって猛特訓した毎日いわゆる「月月火水木金」の総合成果といえる。

トラック島で四日間、応急処置を施して母港を目指す。もう十一月五日になっていた。私も気付かぬ間に十九歳になっていた。

昭和十七年十月二十六日、この南太平洋海戦によって我が方の空母二隻は当分使いものにならぬ。その上戦艦二、巡洋艦三、駆逐艦五を失い、近代戦の花形飛行機は、三艦より発進の約三百機の内百四機が収容出来る「瑞鶴」一艦しか残らなかった。

敵方の発表通りだと、空母二航行不能。撃破は戦艦二、重巡洋艦二、駆逐艦等十五以上という。数の上では勝利だろうが後続が少々である。先方は既に空母を五十隻程も建造中と聞く。また足の速い巡洋艦と潜水艦に切り替え中。当方は大戦艦

この海戦で我が艦内に戦死者約六百、この軍人は皆水葬礼によって送られた。しかし爆風に飛ばされた者はどうなったのか、私はこの一戦だけで七百人は戦死したと見ている。この中には同期の十七志、十四く十九歳の戦友六十人がいる。何回も靖国神社へ参り、その名を呼び、手を合わせ、心で強く念じて、返答など無い。小さくても良い、生き残りの元仲間が身近に感じられる祈禱所がほしい。

昭和十七年十二月、艦の修理最中に艦長室に安置されていた戦死者の遺髪と遺爪を、二人づつ遺骨箱に納め、この中に「翔鶴」の焼け残った飛行甲板の一部五×七センチ、厚さ二・三センチを良く磨き、艦長が「皇国興廃有以一戦」の揮毫きこうを入れる。これを胸に抱き、各戦死者と同郷、もしくは近郷の者が生家に届ける。私も長野県諏訪市出身で同郷諏訪郡落合村の久保田君の遺骨を持って町葬の日に届けた。彼は十七歳である。

「武蔵」「大和」を御生大事に護って、空母等は消耗品と思し召しているふしが感じられる。この戦闘においても、船足の重い艦は護衛の役に立っていないかった。

三十八ノットの艦を二十五く二十三ノットの艦が護れるものか？ その作戦において、我が国は散開作戦、米国は輪形陣である。この海戦の約一年半後、木更津から大型機に乗って、サイパン沖へ一回だけ攻撃機に乗ったが、我が方から突っ込む前から、全艦船は見事な輪形陣で、その百隻を越える全艦船から日本の攻撃機に向かって集中砲火である。

敵飛行機の攻撃には足が遅くて間に合わず、どこにいたか判らないような護衛はいらない。燃料、人員の無駄であった。世界最大の戦艦、最大四十六センチ砲（これが左右上下一杯の角度で動く）、最強の鉄鋼〇〇センチの船体、何百の隔壁、不沈戦艦、上げればまだまだご自慢はあろう。しかし船足の遅い艦では、近代戦に合わない。

【解説】

南太平洋海戦は、ソロモン諸島にあるガダルカナル島の争奪をめぐる、日米双方の機動部隊が戦った空母決戦による海戦であった。

この南太平洋海戦は、米国側では「サンタクルーズ諸島海戦」と呼称しているように、昭和十七年十月二十六日、ガダルカナル島の争奪戦がたけなわとなって、サンタクルーズ諸島沖に日米の機動部隊が激突している。そしてガダルカナル島における日本陸軍第二師団の総攻撃に呼応して起きた海戦でもあった。

米海軍の主力は空母「エンタープライズ」「ホーネット」を主力とする第十六、第十七機動部隊である。一方日本側は、ミッドウェー海戦の雪辱を期す南雲中将が指揮する空母「旗艦」「翔鶴」「瑞鶴」軽空母「瑞鳳」を主力とする機動部隊で、この作戦では戦艦、重巡等十三隻の水上艦艇を前衛に置き、更にガダルカナル島ヘンダーソン飛行場の爆撃任務についていた空母「隼鷹」を基幹とする機

動部隊を現場に急行させて、南雲中将の指揮下に入れた。

米空母の機動部隊を策敵機が発見したのは十月二十六日の午前四時五十八分、第一次攻撃隊六十二機が発進して間もなく、第二次攻撃隊四十四機が午前六時十分に発進した。

第一次攻撃隊は午前七時頃空母ホーネットを発見して爆弾四発、魚雷二本を命中させた。第二次攻撃隊は八時二十分頃空母エンタープライズを攻撃し爆弾三発を命中させた。日本海軍機の攻撃を受けた米空母ホーネットは、前衛部隊の第二艦隊が漂流中を発見し、駆逐艦の魚雷二本によつた撃沈された。

日本側が第一次攻撃隊を発進させて間もなく、南雲部隊（第一航空戦隊）は二機の米索敵機の接触を受けた。そして索敵機は爆弾を投下、一発が「瑞鶴」の後部飛行甲板に命中し、飛行機の着艦が不可能となり、「瑞鶴」は戦列を離れた。

また体験記執筆者の乗る空母「翔鶴」も敵機の

接近をレーダーによつて察知し、戦闘機で邀撃したものの爆弾四発を受け、飛行甲板に損傷を受けた。

しかしこの海戦では、戦術的には日本が渾身の力を絞って戦い、かろうじて勝利を収めた戦いで、ミッドウェー海戦の汚名をそそぐことができたと言われているが、それ以上に飛行機の損失九十二機という痛手を受けた。とくに航空母艦の損傷は、帰還する味方機の着艦を阻害し、そして飛行機の損耗は、機数に倍する練度の高い搭乗員の損失を意味した。短期間で養成困難な搭乗員の損失は、その後の航空作戦に大きな影響を与えることとなる。

体験記執筆者は、機動部隊の中央一列の「翔鶴」など空母に続き右舷に戦艦「武蔵」以下二隻、左舷にも戦艦「大和」以下二隻、前方に「大淀」など重巡二、後方には巡洋艦二、駆逐艦三という堂々たる艦隊行動であったが、船足の重い護衛艦たちは護衛の役に立っていなかった。三十八ノットの

艦を二十五〜二十三ノットの艦が護れるものかと疑問を呈している。

米国産 「第一〇二号哨戒艇」

神奈川県 宮川 績

戦後満六十年、なぜか先の大戦での体験が次々と不思議によみがえってくるものである。それは青春を故国存亡の戦いに捧げたためかも知れない。わずか八カ月の海軍召集であったが、乗船した船は、「第一〇二号哨戒艇」、駆逐艦「初梅」、駆逐艦「潮」、そして最後は「第一雲洋丸」であった。

昭和十九（一九四四）年十二月、東京高等商船学校機関科を卒業、南洋海運株式会社に入社したが、直ちに海軍に充員召集され、翌二十年一月六日付で少尉に任官し、横須賀海軍工機学校にて約一カ月間、海軍士官としての教育を受けた。

当時は、現役・召集を問わず、兵隊に行くときは、必ず町民が駅まで送り、「バンザイ・バンザイ」と歓呼の声に送られて出征したものである。私の行く先は横須賀であったので、ひそかに出征しよ